Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-30

近代会津アイデンティティの系譜

田中，悟

(Citation)
国際協力論集,14(2):145-171

(Issue Date)
2006-11

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/00518337

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00518337

近代会津アイデンティティの系譜

田　中　　悟*

〈もくじ〉

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　「会津武士」の近代――「雪冤勤皇」のゆくえ
　1．近代における「会津武士」とは誰か
　2．「賊軍」という初期設定【第一の敗戦～明治前期】
　3．転換の時代Ⅰ――「雪冤勤皇」路線の台頭【明治後期～大正期】
　4．「日本の中心で、会津をさけぶ」の時代【昭和前期】
Ⅲ　「観光史学」の形成――戦後会津のサバイバル
　1．「第二の敗戦」の衝撃
　2．転換の時代Ⅱ――軍都から観光都市へ【敗戦後の10年】
　3．「観光史学」の成立――創出された「悲劇の会津」イメージ【昭和後期】
　4．『会津人が書けなかった会津戦争』
Ⅳ　おわりに

＊神戸大学大学院国際協力研究科学生

Ⅰ　はじめに

「政治とは何か」という問題に対して、カール＝シュミットはきわめて簡潔に答えた。政治とは友／敵関係をめぐるもの、つまりは友と敵との区別である、と。すべての政治的概念は抗争的な意味を持ち、戦争ないしは革命といった「例外状況」の形をとって現れる「友・敵結束」へと究極的には帰結するような具体的状況と結びついている。

シュミットのこのような政治観は、彼のナチス加担という経歴とあいまって多くの批判や非難を浴びた。しかしその政治観は、国家や国民の有する暴力性をえぐり出すことにおいて、今なお有効性を失っていない。どのような国家にも、どのような国民にも、対立や衝突から生じた「例外状況」の結果として事実上形成された、という側面がつきまとう。数多くの近代国民国家も、暴力によって空間や人々の間に境界線が引かれ、そして成立したのである。シュミットの友敵理論は、その点を鋭く指摘する。

そもそも、何故そのような区分（境界線）が求められるのであろうか。

いま自らが存在しているこの世界全体を完全に理解し尽くすことは、我々には不可能である。そのような理解不可能な世界の混沌を、理解できるような形に加工するための枠組みが、通常「世界観」と呼ばれるものである。この世界観は、「私は何者なのか」というアイデンティティへの問いに答えるための前提となる。何故なら、混沌の闇にたたずむ「私」に、アイデンティティなど考えられないから

である。アイデンティティへの問いは、自分が存在する「場」の理解と切り離すことができない。

前近代において人々が有していたのは、宗教的世界観であった。ヨーロッパのキリスト教を例にとれば、人々は超越的存在を設定し、超越の側から包括的に世界を理解した（すべては神の創りたもうたもの）。

近代になると、それに代わって合理的世界観が台頭した。この世界観は超越的存在を否定した。にもかかわらず、あるいはそれ故に、合理的世界観によって理解できるのは世界の部分に過ぎず、理解不能な混沌の闇に人々は直面せざるを得ない（例えば死の問題である）。こうした混沌の闇を前にして人々は、「私は何者なのか」という問いだけがあって答えのない「アイデンティティの危機」に陥ったのである。

こうした困難を前にした近代人の、近代的な対処法には、主として二つあった。

一つは、混沌の闇の徹底的な隠蔽・無視である。合理的に理解できる範囲だけを自らの存在の「場」とし、それ以外には何も存在しないものとする。この対処法に基づいて、近代人はアイデンティティの危機を乗り越えようとした。

もう一つが、ネイションという、国家を準拠枠とした世界観への依拠である。前近代にあっては、国家は宗教的普遍世界の海の中に浮かぶ「島」に過ぎなかった。だが、近代においては、「（諸）国家の外に世界なし」という形で世界が理解された。国境線によって友／敵が区分され、国境線内の空間を理解可能な範囲として設定する。国境線外の存在も、それが国境線に基づいて成り立つものである限り、「国境に囲まれた同じような別の世界」として想像される。他者理解がナショナル化されたのである。地球上が国境線でほぼ囲いこまれ尽くされている現代は、理念的には混沌の闇が消滅した、ナショナルな世界観を極めた時代なのである。

さて、こうした「ナショナルな世界」を構成する近代国民国家の多くは、戦争・内戦・革命によって、すなわちシュミットの言う「例外状況」によって成立した過去を持つ。そうした過去が想起される場合、ナショナルな記憶はおおむね「英雄物語」として、勝利の栄光とともに語られる。

勝利の物語は、それを共有する者たちの間に共同体への信頼を生み、そこに凝集力を発生させる。近代において、国境線の内部を満たす（べきものと目される）共同体は、特に「ネイション」と呼ばれた[1]。近代人は、栄光に包まれたネイションに没入することで、アイデンティティの危機から逃れようとした。だが、すべての共同体が勝利の栄光とともに成立するわけではない。シュミットが語るように、政治的対立は常にあるとすれば、また近代の歴史が典型的に示しているように、戦争は常に繰り返されるとすれば、いずれの国家であってもそれらのすべてで勝利を収め続けることは難しい。友／敵の区別は勝利を約束するものではなく、あらゆる闘争において、勝者がいれば敗者もいる。敗戦の屈辱ととも

に成立せざるを得なかった共同体も存在するのである。敗北や屈辱の記憶は、過去の闘争そのものの正当性を疑わせ、共同体への信頼を低下させる。通常、それはアイデンティティの危機の到来を予想させる。果たして、敗者の側に立たされた人々は、どのようにその過去と向き合い、「今ここにいる私たち」を規定するのだろうか。

本論は、このような問題意識から出発している。この問題を考えるにあたって、筆者が取り上げようとしているのが、会津である。なぜ会津なのか。

日本の近代が明治維新に始まるとすれば、それは戊辰戦争という内戦を踏まえて成立した。その勝敗は明白であって、敗者となったのは旧幕府方、とりわけ会津藩であった。明治以降、会津にゆかりをもつ人々は、「賊軍」とラベリングされた。明治国家は、国境線の中に官／賊の境界線をさらに引くことで――つまり、戊辰戦争を勝利の栄光に包まれた英雄物語とすることで――「国民（ネイション）」の枠組みを作ったのである。「会津」と名指された人々は、「賊」として国民の境界線の向こう側へと追いやられ、それでも日本国家の枠内で、日本国民として、生きていくほかなかった。勝利と栄光の代わりに敗北と屈辱を背負わされ、アイデンティティの危機に瀕したはずの彼らが、そこでとったサバイバル戦略は、どのようなものだったのだろうか。

本論で筆者が示そうとしている見取り図は、次のようなものである。戊辰戦争における「賊」として、ネイションの境界線の外へと追いやられた親子兄弟の記憶を引き受けた一群の人々は、整備されていく近代国家の中で、ネイションの「勝利の物語」に異議を申し立て、それを組み替えることで、ネイションの物語の内部へと参入し、自らのアイデンティティをネイション内部に位置づけ直そうとした。数十年を費やしたその営みはいったん成功し、「賊」という初期設定は無効化された。だが、「会津」という共同体の枠組みはそこで無効化されることなく、一五年戦争の戦時下においてはナショナルな勝利と栄光の物語の源泉としての新たな凝集力を手に入れ、人々は「会津人」としての我が世の春を謳歌した。

近代日本という国民国家は、1945年に決定的な敗戦を迎える。それは、いわゆる薩長の側に立つ史観からは、近代における初めての敗北であった。だが、「会津」にとっては、それは戊辰戦争に続く二度目の敗北――「アイデンティティの危機」の再来――であった。この違いは、戦後会津のサバイバル戦略に独自の選択肢を与えていく。すなわち、1945年の敗戦を想起する代わりに1868年の敗戦を想起することで、会津の人々は幕末維新期に自らを直結する新たな物語を紡ぎだし、直前にあったはずの戦時下の熱狂と、それに連なる近代の履歴とを忘却した。そして、自らを「無垢な敗者」「近代日本の被害者」と規定することで、再度新たな凝集力を手に入れたのである。

結果として「会津」は、近代を通じて現在に至るまで、集団的アイデンティティの独自なリソースであり続けている。この共同体が

有する、「国民」の内外で翻弄され、屈辱と敗北とに彩られた来歴を検討することで、通常、英雄物語と勝利の栄光とで彩られてイメージされる共同体概念と、近代人のアイデンティティとの関係に、違った角度から光を当ててみたい。

Ⅱ 「会津武士」の近代――「雪冤勤皇」のゆくえ

１．近代における「会津武士」とは誰か

本章では、近代における「会津武士」の共同体に焦点を絞り、幕末維新期から第二次世界大戦期までの「会津」をめぐる動きを見ていきたい。だがその前に、近代において「会津武士」とは誰のことだろうか。本論における定義を作業仮説的に示しておきたい。

明治維新以前、江戸時代であれば、「会津武士」とは会津藩士と同義である。だが、近代における「会津武士」は、そうした身分制度や政治制度による裏づけを基本的には持っていない。彼らは、大きく二つの層から構成される。一つは旧会津藩から連なる旧藩士集団であり、もう一つはそうした血縁と無関係に「会津武士」に思い入れを抱く非士族の人々からなる。

第一の層から見ていこう。戊辰戦争での敗北によって、会津藩は領地を没収され、いったんは消滅した。その後、1869（明治２）年11月、旧藩主・松平容保の長男である容大に家の祭祀の継続が許され、旧会津藩は斗南藩として下北半島に復活した。この地には多くの旧会津藩士が移住したが、1871（明治４）年、廃藩置県によって斗南藩は斗南県となり、その後合併によって弘前県・青森県へと変遷を遂げた。この間、旧会津藩士は、斗南藩設置に際して会津に留まった者・廃藩後も青森に残って骨を埋めた者・津軽海峡を越えて北海道へ移住した者、さらには会津に出戻った者や松平容大とともに東京へ移住した者などに分かれ、四散したのである。その意味で、近代における「会津武士」の共同体第一層たる「旧会津藩士の共同体」は明治期、地縁的には解体されたに等しい状況であったとも言える。

しかしこのうち、旧藩主を中心に東京で集った旧藩士たちは、1912（明治45）年、子爵として華族に列していた会津松平家を継ぐ松平保男を総裁と仰いで会津会を結成し、機関誌として『会津会々報』を発行した。この会津会は現在まで存続し、「会津武士」を結集する機関として機能することになる。だが、そうした人々の大半は若松を離れており、会津会の活動拠点はあくまで東京であった。彼らの多くにとって、若松市を中心とする旧会津藩領は、故郷ではあっても遠い土地であった。

非士族の会津在住者・出身者にとってもまた、会津会は敷居の高い、遠い存在であった。会津会に集う「会津武士」たちには、戊辰戦争における「上下隔離」という、板垣退助の指摘が重くのしかかっていたのである。「夫の会津が天下の雄藩を以て称せらるゝに拘らず、其亡ぶるに方つて国に殉ずる者、僅かに五千の士族に過ぎずして、農商工の庶民は皆な荷担して逃避せし状目撃し、深く感ずる所

あり」[2]という彼の指摘は一定の説得力を持って広く流布し、会津会に集うような旧藩士やその子孫を自認する者たちにとっては長く、克服すべき課題となっていった。

とは言え、近代における「会津武士の共同体」の構成員は、こうした会津会系の、旧藩士の家系に連なる人々だけではない。明治から大正にかけて、上述のように狭く小さくまとまるほかなかった「会津武士」集団は、昭和に入って大きな転機を迎える。詳しくは後に見るように、秩父宮と松平節子（勢津子）の結婚、そして徳富蘇峰の「維新史における会津」講演を契機にして、幕末会津藩に貼り付けられたレッテルは、「賊」から「模範」へといわば極端から極端への転換を遂げる。旧藩士たちは、名誉回復の念願成就を素直に喜んだ。いわれなき「賊」呼ばわりに辟易していた非士族の会津関係者にとっても、「会津」が称揚され、賛美される状況は、それを我がものとする動機付けとして充分であった。かくして、この時期を境として、「会津武士」というアイデンティティが、旧藩士集団の枠を越えて、会津在住者・出身者全体のアイデンティティを体現すべき地位を占めるようになった。ここにおいて、「会津武士の共同体」の第二層が、旧藩士出身でない人々によって、形成されたのである。「会津武士の共同体」のこの構造転換は、基本的に第二次世界大戦をはさんで持ち越され、旧会津藩や会津若松市などとの直接的なゆかりを持たない人々の間にも、「会津武士」への思い入れを強く有する者を生み出した。こうした転換が地域や人々にいかなる影響や変化をもたらしたのか。その点を明らかにするのが以下、本論の課題の一つとなるだろう。

2.「賊軍」という初期設定【第一の敗戦～明治前期】

会津武士の近代は、1868（明治元）年９月22日に始まる。この日の午前10時、会津・若松城の北追手門に白旗が掲げられ、会津藩の戊辰戦争は全面降伏という形で幕を閉じた。

この敗北が、近代における「会津武士の共同体」の初期設定を決めた。すなわち、明治維新によって誕生した近代国民国家・日本における「賊軍」という設定である。それは、単に政権の争奪戦に敗れたというだけではない。彼らは、「王政復古」という大義名分の前に敗れたものとされた。いわゆる「官」に刃向かう者としての「賊」というレッテルが、彼らには貼り付けられたのである。彼らは確かに「忠誠」を尽くした。しかし、その忠誠を受けた藩主・松平容保は、大義名分の源泉である天皇に刃向かう「反逆者」であるとされた。したがって、彼らは全員が単なる「敗者」ではなく「賊」なのであり、その死はたとえ殉死ではあっても「反逆者の殉死」なのであった。

そうした設定は、東京招魂社（のちの靖国神社）という形をとって、全国に示された。1869（明治２）年３月の東京奠都に合わせ、同年６月、九段坂上に起工された東京招魂社は、同月の第１回合祀祭において、鳥羽伏見から函館までの戊辰戦争で戦死した「官軍方」

3,588名の招魂式を挙げた。同年７月には、１月３日（伏見戦）５月15日（上野戦）５月18日（函館兵降伏）９月22日（会津兵降伏）の４日が大祭日と定められた。東京招魂社が祀った「忠勇の神霊」とは、会津方と対峙し、それを破った人々のことであった。戊辰戦争における東軍[3]の戦死者は、東京招魂社／靖国神社において、「敵＝境界外の存在」であると明確に規定された。言い換えれば、この当時、「日本人たる戦死者」とは「会津方でない戦死者」だったのである。

そこで、戊辰戦争を生き残り、明治を生きるほかない「会津武士」たちは、近代国家によって排除された戦死者たちとどのように関わるか、という問題を抱えることになった。戦死した者と生き残った者との間に、近代日本というネイションは、境界線を引いたのである。生き残った者の中には、あくまで戦死者とともに生き、そのまま近代国家の周縁に死ぬ者もいた。しかし彼らとて、日本という近代国民国家の境界線の外に出たわけでは、決してなかった。生者と死者とが国民国家の内外に分断される中で、「会津武士」たちは、葛藤しつつ生きるほかなかった。彼（女）らは、ともに戦った者たちを「賊」と規定し排除する「官軍方」すなわち明治政府の枠内で、その「賊」という汚名を引き受けつつ、生きることになったのである。

いっぽう、靖国の体系の外に捨て置かれた、戊辰戦争における会津方の戦死者たちは、国家による鎮魂・慰霊・顕彰といった「浄化」を経ることもなく放置され、その死は凄惨な記憶として、幕末維新期を生き残った人々の脳裏に刻み込まれた。

そもそも会津戦において、戦死者の死体はすぐには埋葬されず、放置されて無残な姿を晒していた。町野主水「明治戊辰戦役殉難之霊奉祀ノ由来」によれば、「時に官命は彼我の戦死者一切に対して決して何等の処置をも為す可からず、若し之れを敢えて為す者あれは厳罰すと云ふにてありき。されば誰ありて之れが埋葬をなす者なく、死屍はみな狐狸鳶烏の意に任せ、或は腐敗するの悲惨を極めざる可からざるなり」[4]という惨状であった。「彼我」とは表現されているものの、放置され、無残な姿を晒していた戦死者のほとんどは会津方である。[5]こうした光景を目の当たりにしたり、その中に自らの近しいものがいたりした人々にとって、戊辰戦争における戦死者は、「顔の見える死者」であった。実際、戊辰戦争直後から明治前期にかけて書かれた「白虎隊自刃図」を見ると、内臓が飛び出し、流血にまみれて倒れる姿が描かれており、悲劇性よりも凄惨さが前面に出ている。[6]こうした作品群は、彼らの死が当時、感覚的な実感をもって具体的に記憶されていたことを示している。

３．転換の時代Ⅰ――「雪冤勤皇」路線の台頭【明治後期～大正期】

上で述べたような、いわば官製の「王政復古＝官賊史観」による初期設定に対し、旧会津藩をはじめとする佐幕派の立場からなされた著述は、明治20年代に入ってから見られる

ようになってくる。大久保利謙は、この時期、旧幕府側に人々の関心が向けられた所以を次のように述べる。

> 明治二十年代といえば、伊藤博文、山県有朋らの薩長藩閥が政権をにぎった時期で、彼らの政権ヘゲモニーはもはや不動のものとなった反面には、旧幕府勢力の敗北も、もはや動かしがたい歴史的事実となっていた。そうなると、旧幕府の残党にも言い分がでてくるわけで、武力では敗れても旧幕の伝統を自分たちは守るという気慨があった。そういう敗者の心意気が幕末史に向けられたのが佐幕派の維新史論である。[7]

明治期最後にして最大の反政府武装蜂起であった西南戦争が1877（明治10）年のことである。この時期、佐幕派であった者たちが武力によって雪辱を図ることはもはや不可能な状況となっていた。敗北を雪ぐには、別の手段が考えられねばならない。それがすなわち、維新史論だったのである。

また、そうした政治状況とは別に、「白虎隊自刃図」においても、明治20年代におけるある種の変化が指摘されている。明治初期の自刃図の場合、既に触れたように、内臓が飛び出し流血にまみれる隊士の姿が描かれている。だが、この時期を境に、そうした陰惨な描写が少なくなり、作品によってはまったく描かれなくなる。さらに、戊辰戦争は近代戦争の先駆けともいうべき戦争であり、実際の白虎隊員はシャツとズボンの洋装で戦地に赴いたと考えられる。明治初期の作品はそうした事実を反映した構図になっているが、この時期を境に、隊士の着衣は和装として描かれるようになっていく。[8] 20年という年月が、戦死者の記憶からリアルさを拭い去り、それとともに凄惨さもまた徐々に薄れていったのである。生者は死者の顔を忘却し、具体的だった死の感覚は抽象的となっていった。死者たちは、生々しい記憶から操作の対象としての記憶へと移行しつつあった。

この時期以降、田中彰が「雪冤勤王型」[9]と分類する維新史が編まれていく。その代表が、旧会津藩士の手になる著作であった。北原雅長『守護職小史』の出版が明治32（1899）年、同じく『七年史』が明治37（1904）年、山川浩『京都守護職始末』が明治44（1911）年である。これらの著作は、山川健次郎が言うところの「排幕勤王家」[10]によって書かれた維新史に対して、旧藩主および会津藩の「冤罪」を雪ぎ、「佐幕勤王」という形で自らの立場を主張したものであった。この立場に立つ人々は、「佐幕」と「勤皇」との二律背反性を否定し、「真の勤皇」を称し、天皇への忠誠を薩長方と争うことで、「官賊史観」に対して「歴史の取戻し」を図ったのである。

こうした「雪冤勤皇」史観における「雪冤」と「勤皇」とのバランスは、時代を追って微妙に変化した。田中彰によれば、旧会津藩に限らず、こうした「雪冤勤王型」の維新史は、時代が下がるにしたがって、「雪冤」よりも「勤王」へと力点が移されていった。[11] そうした時代的な流れの背景として挙げられるのが、

文字通り「賊将から功労者へ」という一大転換を遂げた徳川慶喜の「名誉回復」である。[12] また、時期的にこれと並行する形で、若松市会は、1896（明治29）年・1906（明治39）年の２回にわたって、陸軍大臣宛てに兵営設置の請願を行なっていた。その甲斐あってか、1908（明治41）年５月、仙台第13師団管下の歩兵第65連隊が編成され、翌６月に若松へ入営した。市こぞっての大歓迎が行なわれたという。以後、若松には第二次世界大戦の敗戦まで陸軍連隊が駐屯し、かつての「賊軍の地」は「軍都」へと装いを新たにしたのである。[13] 「雪冤勤皇」型の明治維新観は、こうした時代状況の中で台頭していた。

そのような歴史的条件の下にあって、「会津武士の勤皇」の一端を世間に示した事件がある。「禁門の変における会津藩戦死者の靖国神社合祀」である。明治維新前に戦死した人々は明治元年当初、東京招魂社ではなく京都招魂社に合祀されていたのであるが、1879（明治12）年の第11回合祀祭から順次、靖国神社[14]に合祀され、1900（明治33）年の第28回合祀祭までに3,633柱が合祀されていた。[15] 「旧山口藩殉難者」も1884（明治17）年の第14回合祀祭と1888（明治21）年の第16回合祀祭において合祀されている。ところが、その中には禁門の変において御所に向けて発砲した者も含まれていた。それに対し、御所を護衛して長州勢と対峙した会津・彦根・越前・薩摩・桑名といった諸藩の幕府方戦死者は、合祀されることなく放置されていたのである。佐幕派の「雪冤」が進む中で、この点が問題とされた。[16]

衆議院議員・村松恒一郎[17]が1914（大正３）年２月３日、衆議院において行なった質問演説によれば、こうした戦死者の靖国合祀を求める請願は1909（明治42）年に初めて国会の場に出されて両院を通過し、1911（明治44）・1912（同45）年にも国会で質問があったが、政府側は「調査中」と述べるばかりでその対処は遅々として進んでいなかった。村松はこうした点を追及した上で、

> 既に此吾吾の質問を出して以来、既に三ヶ年を経過して其当時政府は調査に著手して居ると云ふたのであるから、最早調査は完成したであらうと思ふ、既に調査が完成したならば、政府は此最初の明治四十二年の請願の趣意を容れて、さうして此戦死者を靖国神社に祀ると云ふ意思があるのであるか否や、若し其意思ありとすれば何時頃迄に之を決行するのであるか[18]

と政府に問いただしている。これに対して政府は、「本請願に関しては政府は已に大体の方針を決定し目下之が詮議の手続中なり」と答弁したという。[19] そして翌1915（大正４）年４月、会津藩をはじめとしたこれらの戦死者は、靖国神社に合祀されたのである。旧会津藩の戦死者を総体として「賊」の地位に留めおく日本近代の初期設定は、ここでその一角が崩れたことになる。ただし、「靖国神社と会津藩との関わり」というこの問題は、それ以上広がることなく、議論の中身は「禁門の

変における勤皇」というテーマをめぐる抽象的なものに留まった。のみならず、旧会津藩士の合祀に関してはこれが最初にして最後であり、これを突破口にして戊辰戦争の会津方戦死者の合祀にまで至ることはついになかった。既にこの時期、重要なのは戦死者の合祀そのものではなく、「勤皇の論理的筋道」を通すことだったのである。したがって、筋を通した時点でこの議論は終わったのであり、「禁門の変の幕府方戦死者合祀」という事実すら、後には忘れ去られていくのである。

4.「日本の中心で、会津をさけぶ」の時代

【昭和前期】

昭和の時代に入り、1928（昭和３）年１月早々、旧会津藩の「勤皇」を誇示すべき決定的なニュースが日本中を駆けめぐった。皇弟・秩父宮雍仁と松平節子との結婚である。松平節子は、松平容保の四男で当時の駐米大使・松平恒雄の長女である。この縁組を伝える新聞紙面には「慎重なる御人選」「この上なき御良縁と拝す」などといった見出しが躍った。また、「松平家と皇室との御縁」と題した記事は、「由緒あるその家系」との小見出しがつき、「節子嬢の厳父恒雄氏は旧会津藩主松平容保氏の四男で明治十年四月をもつて生れた……容保氏は英明の資あり、維新に際し公武の間に立つて斡旋努めたが、事志と相違し、当時白虎隊で有名な会津の城主であつた」と会津松平家を紹介している。[20] また奇しくもこの年は「かの明治戊辰の思出深かるべき年の今や一回り」[21]した60年後の戊辰の年であった。平民籍だった節子が結婚に際して華族に列するため入籍した松平子爵家の当主・松平保男は、「旧藩時代の老人達もさだめし喜んでゐることゝ思ひます。老人達にしましても、明治戊辰の会津藩の立場と今日このめでたき昭和戊辰の奇しきめぐりあはせを述懐しながら私等と同じやうな気持で歓喜にむせぶことでせう」[22]と語っている。天皇家の慶事といういささか特殊な条件下ではあるが、この時点においては、旧会津藩の「雪冤」はもはや遠い過去の、「老人達」の問題と化しつつあることを、これらの記事はうかがわせている。

ともあれ、およそ40年にわたって徐々に進行してきた旧会津藩の「雪冤」は、天皇家と会津松平家との縁組という形でこのとき、一つの頂点に達したのであった。

それから９年後の1937（昭和12）年５月、『近世日本国民史』の執筆を進めていた徳富蘇峰は、『会津籠城編』に着手するに当っての実地調査のための東北旅行に出た。青森・弘前を回り、会津若松に入った蘇峰は５月９日、若松市公会堂で「維新史における会津」と題して講演を行なった。早川喜代治によれば、蘇峰は次のように述べたという。

> 会津気質は藩祖保科正之公により作られた。公は本来の勤皇家で、公武合体、朝幕両存論者であるが、政治家として大の手腕家だった。……かく松平容保公並にその一藩は、藩祖正之公の遺訓を奉じ、尽忠報国の大精神より、慨然として京都守護の重責に任じ、藩の一切を犠牲として永い間孝明

天皇の宸襟を安んじ奉った功績は、明々白々たる事実である。……その尊皇の大精神においては、藩祖以来の伝統的精神で、一時的のバラック建てのものでないから、その間何等の変わりはありようもない。当時騎虎の勢で鳥羽伏見の戦となり、或はその後の変乱とはなったが、これらは今日の政民両党の争いのようなもので、言論や策動の外に鉄砲を加えたに過ぎない。[23]

また、『会津籠城編』脱稿を記念して、1939（昭和14）年３月５日に在京会津会が華族会館で催した招待会でも、蘇峰は再度の講演を行なった。蘇峰は、「会津藩の勤皇精神は藩祖正之公以来の伝統的なものでいわば沽券がついている。この会津藩が一晩にして逆賊になるとはこの世のミラクルだ。人間業ではできぬ。ここでこれは反対党の宣伝であることに気づかねばならない」と述べ、「維新の歴史には、逆賊などということは、存在の余地がない。徳川慶喜公と会津の殿様は逆賊の両横綱となっているが、これはとんでもない大間違いである」と言い切った。[24]満州事変以降、言論統制が質的強化を遂げた時代にあって、言論統制そのものに寄り添い、戦争遂行を支援する「言論報国」によって時代の寵児となっていた蘇峰[25]と、勤皇路線をひたすら突き進むことで戦時下日本の優等生となりつつあった「会津武士の共同体」との、見事なまでの波長の一致を、ここに見ることができよう。この後、両者は同一歩調をとって戦争遂行に邁進することになる。

徳富蘇峰の主張に力を得た在京会津会の有志は1940（昭和15）年、「会津藩勤皇精神顕彰会」を結成し、文部省に対して小学国史教科書の改定運動を展開した。その要求は、⑴全面的に「官軍」の文字と「官軍に抵抗云々」の文字を削除すること、⑵会津藩主松平容保が孝明天皇の信任の下に京都守護職として七年間にわたり忠勤した史実を明記すべきこと、⑶松平容保が後年特赦されて正三位となったことを明記すること（これについては、同様の事実が既に明記されていた西郷隆盛の記事に比し、不公平である）、の３点であった。文部省との交渉に際して会津会側は、前述の徳富蘇峰講演速記録を参考として文部省に提出したという。[26]

これらの要求は文部省によって全面的に受け入れられた。1941（昭和16）年の第５期国定教科書『小学国史　下巻　尋常科用』には、「後、朝廷では、容保がかつて京都を守護して、忠勤にはげんだことを思し召され、その罪をおゆるしになつた上、正三位をお授けになつた」という新たな一文が挿入されたのである。[27]会津会総裁である松平保男がこの年の会津会総会において述べた次のような言葉には、確立しつつある「勤皇会津」への満ちあふれた自信を看取することができよう。

会津人といへば、旧会津藩領の方々を申しますが、それには数百年来の伝統と縁故とがあります。維新の時には逆境にたち、一度は朝敵の汚名を蒙りましたが、今日では肩身のせまいことは何も御座いません。

当時と雖も会津藩全部が一致団結して、一定の大方針即ち尽忠報国の誠に向ひ突進したのでありまして、その当時の行動は今日と雖も何等恥づるところはありません。むしろ誇りとするところであります。これには諸君も御異議はないことと思はれます。[28]

ここに至って、近代日本において「会津武士」に冠せられていた「賊軍」というレッテルは、ほぼ完全な形で、いったん克服されたと言えよう。[29]秩父宮と松平勢津子[30]との結婚による、天皇家と松平家という「頂点」間の結びつきを越えて、「会津武士の共同体」は「天皇を中心とする近代日本の国家観念」[31]へと統合された。だがそれは、「会津」がこの時期、近代日本国家の内部へと解消される方向に進んだことを意味しない。「会津」の「勤皇精神」は、他に抜きん出た、誇るべきものとされ、そのことがかえって、かつてとは正反対の方向に「会津」の凝集力を高めたのである。

「国民学校綜合雑誌」と謳った『国民教育』1942（昭和17）年７月号は、「伝統に輝く会津の教学」「鍛はる会津健児」などのコピーとともに、会津藩教学に関する特集を組んでいる。[32]会津藩の教学は、「大東亜戦争」のもと、あらゆる国民が見習うべき模範の地位にまで持ち上げられたのである。

この特集に登場する会津人に共通してみなぎっているのは、「かくて大東亜戦争の理念と会津藩教学は、その根本的な要素に必然共通するものが見出されるのであります[33]」と言い切りうる自負であった。その語りのリソースとして常に参照されるのが保科正之であり、その教学の精華として語られるのが白虎隊であった。

保科正之公は大義名分を重んずる朱子学を藩学とし、山崎闇斎を賓師とし、自ら朱子学を究められ……［しかしながら］闇斎は教育の目標を「御国のために」と言ふことを明確にされて居り、正之公は朱子学のみによる大義名分の究明に満足することが出来ず、神道に入り其の奥秘を究められ日本精神の真粋を神道の教養によつて見出し、把握されたのである。即ち会津精神は日本精神であり会津魂は日本魂である。

此の事たるや国民学校教育の根本精神……と同一でありその具体的顕現として白虎隊の忠誠がある。此の場合隊士の心は既に君国と一体不可分のものであり、君国亡びて自己なしとの精神は皇道帰一の精神であつて、国体に対する信念を深からしめる錬成の途であり、皇国民錬成の根本精神であると言はねばならない。[34]

朱子学的な大義名分論と神道家の要素とを併せ持つ保科正之は、戦時下の日本における総動員体制のニーズに合致した存在であった。旧会津藩の藩祖と目されるこの人物は、「会津武士の共同体」が戊辰戦争の「雪冤」を果たし、限りない「勤皇」への道をひた走る中で大いに脚光を浴びた。[35]時代が要求する「日本精神」は会津にあり、「会津精神」は保科

正之にあり、という図式が盛んに語られた。そしてその精神の顕現として持ち出されたのが、日新館に象徴される会津藩教学であり、その成果としての白虎隊であった。70年を越える年月を経て、「白虎隊」はもはや遠い過去の物語となっていた。その死の凄惨さはおろか、悲劇性までもがここでは捨象され、会津藩の教学によって咲いた「立派な花」[36]と形容されるのである。

また、この段階における語り手・聞き手は、「国民学校」という舞台が象徴しているように、旧会津藩士といった旧来の狭い枠を抜け出し、域内の同質性を作り出す擬似“ナショナル”な性格を有するに至っていることも注目に値する。それまで、「会津武士の共同体」は必ずしも会津を代表するとは言えなかった。例えば、1916（大正５）年、城跡を公園として利用しようとする若松市に対して、その土地を所有する松平家が利子を含めて３万8,000円で売却した件について、地元の『会津日報』は強い非難を浴びせている。すなわち、既に「歴史上の旧君」に過ぎない松平家の「高利貸の顰に模ふの所為」を見ては「市民を観ること、路傍の異人同様でなきかを疑はる」と述べた上で、「噫、愛想が尽きた也」とその記事を結んだのである。これに対し、仙台の『東北日報』が反論記事「逆徒会津日報」を書き、『会津日報』も再反論して紙上論争に発展するのであるが、『東北日報』が旧会津藩主たる松平家への無礼を問題にするのに対し、『会津日報』は「日本開闢の始めより日本臣民の君主は皇室の他に一切なき」ことを主張して反論している。[37]「会津武士の共同体」の中心たる松平家に対する、『会津日報』のこうした態度は、「会津武士の共同体」と会津在住者との間に存在した深い溝をうかがわせ、会津人たる前に日本国民たろうとする後者の志向も読み取れる。[38]だが見方を変えれば、その立論構成は、皇室への忠誠という一点さえクリアすれば、反・松平家の論拠が失われることを示してもいる。さらに、松平節子（勢津子）の結婚や徳富蘇峰の講演は、それまで必ずしもしっくりいっていなかった「会津武士の共同体」と旧藩士ではない会津在住者・出身者との間の溝を埋めただけでなく、「会津人たること」が日本国民の周縁から中心への道を開くことを示したのである。だからこそ、両者一体化のメルクマールがこのあたりに見出せるのである。言い換えれば、昭和に入ってようやく、「会津武士の共同体」と会津在住者・出身者とを併せて「会津」という一言で表すことに違和感を覚えない状況が出現したのだといえよう。

ところで、白虎隊はイタリア・ドイツからの賞賛も受けていた。1928（昭和３）年にはムッソリーニ首相の斡旋でローマ市から白虎隊記念碑が、また1935（昭和10）年には駐日ドイツ大使館付武官から白虎隊頌徳碑が、それぞれ寄贈されて白虎隊士の墓所である飯盛山に建てられた。「白虎隊」は日独伊親善の象徴といった様相も呈し、1938（昭和13）年に来日したヒトラー＝ユーゲントの訪問を受けた若松市は歓迎一色に塗りつぶされた。また、イギリスのボーイスカウトの影響のもと

に、1910年代から20年代にかけて各地で発足していた少年団は、30年代には学校を中心に編成され、その基本精神のあり方はイギリス流からイタリア・ドイツ流へ、また「白虎隊」流へとシフトしていった。[39]

かくして、「会津精神」はこの時期、独伊との枢軸関係とも同調しつつ、日本精神を代表する核心的地位についた。「会津」という共同体は、会津在住者・出身者を丸ごと巻き込んで、日本国民（ネイション）の周縁的地位を脱した勢いそのままに、ついにその中心にまで躍り出たのである。

Ⅲ　「観光史学」の形成――戦後会津のサバイバル

1．「第二の敗戦」の衝撃

昭和20（1945）年８月15日を、蘇峰は山中湖畔の別荘で迎えた。ちょうど82歳と５か月である。敗戦という事態をうけて一切の公職から退き、みずから「百敗院泡沫頑蘇居士」という戒名を名のった。「百敗」して自分の夢が「泡沫」に帰したという自白は、敗戦が言葉をはさむ余地のないほど自明で完膚なきものだったことを意味する。蘇峰は戦意高揚を自己の任務と考え、何の躊躇も疑問もなく戦争を支持してきたから、敗北も完璧だった。日本国家の敗北は蘇峰の敗北であり、両者は一体だったのである。[40]

大本営発表を真面目に信じ、1945年８月15日の玉音放送は天皇自らの決戦の決意表明だと考えて前日には赤飯を炊かせていたという徳富蘇峰を、日本の敗戦という事実は徹底的に打ちのめした。蘇峰によって鼓舞され、戦時下の日本にあって蘇峰とともに我が世の春を謳歌していた「会津武士」たちにとっても、敗戦という事実が衝撃でなかったはずはない。日本国家の敗北が蘇峰の敗北であるならば、それはとりもなおさず彼らの敗北でもあった。「会津武士」たちは、苦難の末にようやく「官軍」となった今回もまた、勝てなかったのである。

「若松市に進駐した米軍の市内外出によつて商店街は従来の寂しさを一掃し、土産物をめぐつて賑かさを示」し、[41]若松商工経済会が「一層良い若松の建設」を議題に米軍と懇談会を持つ[42]など、経済面でいち早い対応が見られたいっぽう、戦勝記念を当て込んで市内八角神社境内に建てられた石碑は、碑文を刻む前に敗戦となって、無地のまま「会津人の先見の不明」をあざけるかのように「ぶざまに放り出されて」いた。[43]敗戦直後のこの時期に、「会津精神」や「白虎魂」がどのように扱われたかを示す史料はきわめて乏しいが、おそらくはこの無地の大石碑と同様、うやむやに放り出されていたものと思われる。

2．転換の時代Ⅱ――軍都から観光都市へ

【敗戦後の10年】

1948（昭和23）年６月、若松市公会堂で、第４回全日本観光連盟総会が開かれた。全日本観光連盟の会長・松平恒雄参議院議長の肝入りである。[44]同じ公会堂で徳富蘇峰が熱弁を振るってから11年、明治以来の連隊駐屯地と

して軍都でもあった若松は、この総会をきっかけとして、面目を一新した観光都市作りを目指してそのスタートを切ることになる。

当時の世相は依然として敗戦後の混乱のさなかにあり、禁止されていた飯盛山の白虎隊の墓前への小中学生の集団参拝が解禁にはなっても、石段を登る人影は少なかった。当時の若松にとって、我が世の春を謳歌した第二次世界大戦中の記憶は、戦後を生き抜くにあたって、明らかに重荷になっていた。全日本観光連盟総会の若松開催はこの文脈に位置づけることができる。軍国主義と軍都の痕跡を拭い去り、観光都市として再出発することが、戦後若松の目指すべきテーマとなったのである。観光都市化を目指す若松市が当初、観光資源と見なしていたのはまず磐梯山であり、次いで東山温泉であった。1950（昭和25）年９月、磐梯山が磐梯朝日国立公園として国立公園に指定され、さらに1955（昭和30）年１月１日、近村７カ村と合併した若松市が「会津若松市」と改称した際に東山・芦ノ牧両温泉や飯豊山・背炙山・猪苗代湖西岸などが市内に編入されたこともあって、会津観光はこうした自然観光を売りにしたものとして出発した。

しかし、「会津観光の特色」とされたのは、そうした豊かな自然ではなかった。

> 東北地方の観光の特色の一つに、郷土芸能と年中行事があげられる。とくに、会津は民謡をはじめとして、郷土芸能・祭礼・年中行事の宝庫であるが、それを市民が積極的に観光対象として育てていったところに、観光都市への町づくりがあった。[45]

その中でも、戦前との関連でとりわけ興味深いのが「祭り」という観光資源である。

> 昭和28年（1953）10月、第一回の会津まつりが挙行された。先祖に感謝する市全体の統一祭という意味から出発し、翌年からは９月22、23、24日の三日間、毎年開催することになった。28年にはこれと同時に、蒲生氏郷三百六十年祭が挙行されたが、これは会津の歴史が観光対象として重要であることを教えていた。横山武市長が、昭和31年（1956）３月再選されると、観光にはとくに力を入れ、翌32年９月挙行された戊辰戦後（ママ）九十年祭を契機に、会津まつりの性格を観光祭に改め、白虎行列を中心行事とするように自ら指導した。これより会津の観光に、鶴ヶ城と白虎隊の歴史が強く打ち出されることとなった。[46]

つまり、戦後の観光都市化においては、まず行政サイドの観光化の意図が先にあって、その資源として歴史が動員されるという構造になっているのである。観光というテーマを意識しつつ新たに編み直されたその「歴史」は、織田信長・豊臣秀吉とゆかりの深い蒲生氏郷が先行し、幕末会津藩の戊辰戦争・白虎隊があとに続く（第２回以降の会津まつり開催日である９月22日は、新暦ではあるが戊辰戦争における会津藩降伏の日である）。それは、江戸時代を中心にして完結し、近代へ踏

み込むことはほとんどない。こうした図式の中で、戦時中には近代日本の軍国主義と会津とを結びつけた「白虎隊」は、そうした近代日本との生々しい関係から切り離され、純然たる観光資源と化した。「軍都・若松」の経験をスキップし、前近代の会津に直結した「観光都市・会津若松」の創出――これは、「会津武士の共同体」との分離を意識の上で経験せず、戦前からの惰性で一体化したままであった戦後間もない時期の会津在住の人々にとって、決定的に重要なリセットボタンとなった。この時、人々は直前に確かにあった軍国主義の時代の記憶を消し去り、前近代史、幕末維新史との間に新たな関係を結んだのである。

赤澤史朗が指摘するように、敗戦後の日本は、「軍事的なもの一般に正面から向き合おうとしない意識を生み出し、さらには戦争犠牲者・戦死者の忘却を生み出していった」[47]。この忘却は、戦後日本社会においてはかえって「忘れられた犠牲者・死者」を想起する動きにつながっていき、本来なら記憶に止められるべきであった「忘れられた犠牲者・死者」とは誰なのかをめぐる対立として展開されていくのである[48]。会津の「記憶リセット」は、そのような戦後日本社会の忘却と想起の文脈に配置されるべきものである。

とはいうものの、戦後会津のたどった経路は、独特の様相を帯びている。その最大の特徴は、忘れられた犠牲者・戦死者を「敗戦国」として想起するという行為が、戊辰戦争と一五年戦争との二重写しになるという点にあった。二つの戦争体験は、「会津武士の共同体」としては、ともに苦い敗戦の記憶である。しかしそこには、もはや遠い昔となった記憶といまだ生々しい記憶、凄惨な戦場となった記憶とならなかった記憶[49]というように、質的に違いがあった。「会津」以外の場では、「敗戦国」としての忘却と想起とは、避けようもなく「先の大戦」をめぐるものであった。しかし「会津」では、代わりに戊辰戦争を想起するという選択肢が存在し、しかもそれは観光資源としても機能していたのである。

この特殊事情が、「先の大戦」をめぐる想起――それは、もし実現したならば、軍国主義のもとで我が世の春を謳歌した自らの過去が厳しく問われ、「アイデンティティの危機」の再来に直結するものにならざるを得なかったであろう――を、会津の人々が素通りすることを可能にした。白虎隊自刃の８月23日、会津藩全面降伏の９月22日といった記念日が強調されるのに反比例して、８月15日という日付の持つ意味は、「会津」では顧みられることなく、「一五年戦争と会津」という問題はほとんど放置に等しい状態に置かれるのである。しかも、既に述べたように、一五年戦争期は、それまで必ずしも一体感のなかった旧藩士集団と会津地方在住・出身の一般市民とが一体化し、「会津人」イコール「会津武士」という意識が形成された時代であった。それが忘却されることによって、「会津人イコール武士」といった自己イメージが、あたかも昔からそうであったかのように、アイデンティティ＝リソースとして独り歩きを始め

るのである。

こうして戦後「会津」は、軍都から脱却すべく観光都市化を推進する中で、「第二の敗戦」経験を忘却したまま、「第一の敗戦」を想起するという選択をする。このような道を選んだ人々は以後、その自己イメージをいかに形成していったのだろうか。この点が、次節で論じるべき中心テーマである。

３.「観光史学」の成立――創出された「悲劇の会津」イメージ【昭和後期】

前節で見たように、戦後、「歴史と伝統に育まれた観光都市」と自己規定された会津若松で語られる「歴史」とは、軍都としての自らの近代史を忘却したままで、前近代史、とりわけ幕末維新史を想起するという独自の構造を持っていた。昭和前期の「会津」の語りを規定したのが徳富蘇峰であるとすれば、戦後「会津」の語りを規定したのは司馬遼太郎であった。

> 長州藩との和解がしづらくなった、戦後の一番の本は「王城の護衛者」だと思うんです。あれは司馬遼太郎の名作ですからね。あれは読んだ人が「会津藩はだまされた」と思う決定打ですから。[50]

> 会津の歴史の問題は、本の影響が大きいと思う。特に戦後は、作家が書いた本がすごく読まれていて、その影響が大きかったと思う。「王城の護衛者」を書いた司馬遼太郎先生とか、早乙女貢先生、宮崎十三八先生――このお三方の影響がどっしり大きい。[51]

前の発言は第29代会津若松市長（1987-1991）である早川廣中のものであり、後者は第28代市長（1983-1987）の猪俣良記のものである。

司馬は1965（昭和40）年、会津松平家、とりわけ松平容保を取り上げた「王城の護衛者」を『別冊文藝春秋』誌上に発表した。この作品は、松平容保ひいては会津藩を、権謀術数や政治的駆け引きとは無縁な、いささか律義に過ぎる君臣集団として描いた。その会津藩は、松平春嶽や徳川慶喜に、そして薩長に翻弄され、望まずして就いた京都守護職としていつしか浪士粛清の血に汚れ、春嶽や慶喜が巧みに身をかわす傍らで戊辰戦争の敗北を一身に背負った。その悲劇性を強調する語り口は、戦前の徳富蘇峰の語りなどには見られなかったものである。

この作品は、孝明天皇が松平容保に２通の宸翰を与えたという史実をクローズアップし、容保が死ぬまでその宸翰を肌身離さず持っていたというエピソードで物語が閉じられる。宸翰自体は、北原雅長の『七年史』にも記載があるようによく知られたものである。だが司馬はそこに、戦前とは違う独自の語りを与えた。「王城の護衛者」において、この宸翰の挿話は、孝明天皇と松平容保との個人的信頼関係、そして松平容保の孝明天皇個人への徹底した憧憬と忠誠へと結びつけられる。策謀渦巻く京都にあって、孤立する無力な孝明

天皇は、松平容保と会津藩とを頼みとした。「愚鈍なほどに律義」で「少年の純情」を有する松平容保は、孝明天皇からの恩義を受け、その信頼を後ろ盾に、長州系の志士や公卿の前に立ちはだかった。のみならず、孝明天皇は松平容保が病に臥した折りにはその快癒のため自ら宮中で祈祷し、孝明天皇崩御の報を耳にした容保は「放心し、膝が立たず」と描写される。そして幼帝践祚を境に政情は一変し、会津藩は薩摩藩に裏切られ、徳川慶喜にも裏切られて、全面降伏の憂き目に遭うのである。

こうした「王城の護衛者」の物語構成が何を意味するか。その中では、会津藩の「勤皇」とは松平容保の孝明天皇に対する忠誠に収斂する。両者の個人的で親密な信頼関係こそが、会津藩の忠誠の根拠なのである。逆に言えば、孝明天皇崩御・明治天皇践祚の時点で、松平容保と会津藩の「勤皇の絆」は絶たれたのである。

従来的な「会津武士の共同体」的な価値観からは、こうした語りは決して容認できない。明治の初めから彼らが追い求めてきた「雪冤勤皇」における「勤皇」とは、孝明天皇個人に限ったものではなく、皇室そのものに対する忠誠だったのである。そうでなければ、戊辰戦争をめぐる「雪冤」は論理的に不可能となる。

しかし、戦後、近代を忘却したまま想起された幕末史においては、そうした骨がらみの関係はかえって足手まといになる。会津藩と天皇家の関係ではなく、松平容保と孝明天皇との個人的な人間ドラマとして「勤皇」を語ることで、その関係が明治に及ぶことはなくなる。そうなれば、近代会津を明治国家から切り離された存在として語ることが可能になる。それは、「軍国主義の寵児」という近代会津の側面を忘却の淵に沈め置く戦後会津の「観光史学」には、極めて好都合な設定であった。

ただし、会津に関するこうした「司馬史観」の設定には、“副作用”もあった。すなわち、戦後会津において人々が近代を語るときに、「会津がいかに虐げられていたか」を、しきりと強調するようになったのである。戊辰戦後、近代の「会津」は、明治政府から徹底的にいじめられた被害者としてのみ、語られるようになった。

この時期、会津若松市を中心とした言説空間で語られた「歴史」――それは、「観光史学」と自称され、揶揄もされた――の語り手として第一に挙げられるべき人物に、宮崎十三八がいる。旧制会津中・新潟高を経て会津若松市役所に入り、商工観光部長まで勤めた宮崎は、会津史談会・会津史学会といった会津の郷土史家団体の有力者であった。司馬遼太郎との親交も深かった彼は、「司馬史観」を引き継ぐ形で、戊辰戦争やそれに続く会津の「不遇」について盛んに発言している。[52] 会津藩滅藩、その後の酷寒の地・斗南への強制移住。戊辰戦争時、戦死した会津藩士の遺体を賊軍であるが故に埋葬できなかったこと。会津出身者というだけで政府高官にはなれなかったこと。福島県発足時に県内最大都市で

あった若松でなく、北端の小都市福島に県庁が置かれたこと。旧会津藩領であった東蒲原郡の新潟県への編入。鉄道の敷設が県内他都市よりも遅れたこと。旧制高等学校・高等専門学校が若松には設置されなかったこと――それらの発言は、事実誤認や牽強付会をはらみつつも一定の歴史的事実を踏まえ、そこから派生する「怨恨」はもっぱら「長州」へと向いた。司馬遼太郎はあるエッセイの中で、長州を激しく嫌う反面、薩摩・土佐に対して寛大な会津人の声を紹介しているが[53]、これは宮崎をはじめとする戦後会津の「観光史学」の傾向であり、さらには司馬自身と重なるものでもあった[54]。両者は、「アンチ長州史観」を相乗的に形作っていた。

昭和前期、徳富蘇峰の影響の下で「勤皇会津」が高唱されたように、昭和後期、司馬遼太郎の影響下に会津は「観光史学」全盛の時代を迎えた。司馬文学が世間に受け入れられている限り、「会津」の言い分もまた、世間的に受け入れられるものとして流通した。一五年戦争下に我が世の春を謳歌し、敗戦によって再度徹底的に打ちのめされた記憶は、忘却の彼方へ押しやられた。幕末維新期と現代とを直結する戦後会津の「観光史学」は、「会津の不遇」と「長州への怨恨」とがあたかも戊辰戦争から現代まで連綿と続いてきたかのような「歴史」を紡ぎ出した。つまり、第二次世界大戦後の文脈において「会津」を語るとは、自らを「近代日本の被害者」として語ることに他ならなかった。言い換えれば、表面上の語り口とは裏腹に、「会津」がそのように語られるべき存在となったのは、第二次世界大戦後のことなのである。

戦後「会津」における「観光史学」の潮流は、現在もなお根強く存在している。ただし、司馬遼太郎や宮崎十三八といった重要人物が相次いで世を去る中、基本的な「不遇会津の長州への怨恨」という枠組を前提としつつも、その怨念をどうにかして解き、「和解」を模索しようという動きが出てきてもいる。そうした動きを会津若松において代表するのが、畑敬之助である[55]。

畑はまず、長州への怨念を「すっきりしない靄みたいな怨念」と表現し、その怨念を言葉にしようとした人物として宮崎十三八を取り上げる。そして、宮崎が語る怨念のうち、史料的に検討可能な論点を取り上げて検討し、靖国神社合祀の問題を除けば必ずしも長州の責に帰すべきものではないと結論づける。

その上で畑は、1863（文久３）年の「文久政変」に始まり、翌1864年の「蛤門の変」から1866（慶応２）年の「征長戦争」に至る長州藩と会津藩との抗争の歴史に目を向ける。これらの抗争はすべて「実質は会津対長州の戦に終始した」のだととらえる畑は、「会津藩はなぜか文久三年からの三年間、長州藩を仇敵視するかのように、長州に不利に不利にと行動してきた」と分析する。そして、先に述べた「会津の人々の怨念は根拠が弱い」という分析と合わせ、「靄みたいな怨念」に対する理性的な「克服」を模索する。「会津の悲劇」や「薩長の権謀術数」といった戦後会津の「観光史学」における従来的な主張に異

を唱え、長州との「和解」を目指す畑の議論は、宮崎らの戊辰の「怨念」への拘泥――会津若松市は1967年以来、山口市や萩市からの姉妹都市提携の提案を一度ならず拒否している――を批判し、その議論の限界を超えようとするものである。しかし、幕末維新史から現代の問題を論じるという畑の議論は、近代をスキップする「観光史学」のスタイルを踏襲しており、依然としてその枠内の議論たらざるを得ないという性格を有してもいるのである。

4.『会津人が書けなかった会津戦争』

畑とは別の角度から、戦後会津を規定してきた「観光史学」を批判する論者は、既にいる。会津在住でも出身でもない非会津人の立場から、長年にわたって会津史研究に従事してきた牧野登は、その代表的存在であろう。

牧野は1976年、戊辰戦争当時の会津藩家老・西郷頼母の研究から会津史研究に着手するが、その際の問題意識として「多くの日本人に共通する心理として沖縄に対するのに似たある種の後ろめたさ、それに加え、白虎隊自刃の悲劇を悲劇としてではなく、勇壮無比・挙国一致の美談として軍国主義思想を徹底的に叩き込まれた少国民世代の心底に根強い原体験への嫌悪、そしてその象徴としての会津への反撥のようなもの」[56]があったと回想している。こうした牧野の姿勢は、会津史研究においては特異なものであった。

ここから牧野は会津史研究に深く関わっていくが、戊辰戦争と第二次世界大戦との関係への問題意識は彼の研究の原点として常にあった。例えば、1988年には次のような提起を行なっている。

> しかし一歩踏み込んで、一世紀をはるかに超える昔の、しかも日本人全体から見ればあくまでも一部特権武士階級相互の権力争奪戦であり、一般民衆にとっては被害を受けたに相違ない戊辰戦争を、そしてその後裔が大多数を占めるはずの現在の若松市民が士族の倫理観に依拠して論じ、しかもそれが、戦後日本人普遍の価値観にそぐわないものが多分に濃厚に見受けられるのはなぜであろうか。
>
> 会津における戊辰戦後史は、どのような経緯を経て今日にいたり、士族の倫理が拡大再生産されて会津一般市民のものとなり、その意識の流れは、現代に生きる日本人全体の一部を構成する会津人として、今次大戦戦後意識の大きな流れとどのように重なり合い、あるいは重なり合わないものとして流れを形成しているのであろうか。[57]

このような問いを投げかける牧野は、「会津の市民は全員、士族意識を持っている」と断言する宮崎十三八の「観光史学」に対して次第に違和感を抱くようになり、会津史を研究しつつもその批判者となっていった。

十三八さんは晩年期に近づくにつれ、「会津戦争の悲劇をもっと早く日本人が知っていたならば、太平洋戦争の悲劇は避けら

れたかもしれない」と、繰り返し述べるようになりましたが、このあたりの難しいところを避けて、あくまでも、「敗者の会津に非はない」とする観光史学を掲げながら、その枠内で会津の悲劇を日本人全体の教訓とされようとしたところに、根本的な無理がありました。

私が十三八さんに期待しようとしたものは、旧態依然とした“怨念史観”の延長を踏襲しつつ、装いのみを代えて喧伝する“観光史学”による“最後の収穫人”などではなく、悲劇の内因を掘り下げ、悲劇を招来せしめた会津に日本人の悲劇を見、一方、国際化が問われる日本人の歴史意識胎生の動きに、どこかで連動しえる橋頭堡を会津の内部に構築する“最初の種蒔く人”だったのです。[58]

牧野はこのように、宮崎十三八の立ち位置を総括する。宮崎は「会津戦争の悲劇をもっと早く日本人が知っていたならば」と述べたという。しかし、牧野の「期待」からすれば皮肉なことではあるが、ここで浮かび上がってくるのは、宮崎自身が、ひいては戦後会津自身が、実は「会津戦争の悲劇」を知らなかったのではないか、という疑問である。

会津は何処も空襲を受けなかったし、若松には陸軍の連隊があって、大陸へ出征し多くの戦死者を出したが、戊辰戦争ほどの数ではなかった。[59]

こう述べる宮崎は、1925年生まれでありながら、明らかに「戦争」を知らないのである。だからこそ、先の引用に続けて「空の白箱が戦友か遺族の胸に抱かれて帰って来て、人々の涙をさそったが、戊辰戦争のような悲惨な血みどろの争いや無惨な死がこの地にあったわけではない」[60]といった、見方によっては極めて安易な対比ができる。「戊辰戦争のような悲惨な血みどろの争いや無惨な死」は、「この地」にはなくても「かの地」にはあったのだ。若松から戦地に向かった兵士は、そのような「悲惨な血みどろの争いや無残な死」の当事者であったのだ。この当たり前の事実に宮崎が思い至ることはない。宮崎が事あるごとに語る「戊辰戦争の悲惨」の、その表現とは裏腹の「軽さ」は、戊辰戦争の被害を原爆に例えるくだりに遺憾なく発揮される。萩をハワイに、長州をアメリカに、砲撃を原爆に、それぞれなぞらえた上で、「一般住民を全く無差別に暴力でぶっ殺したのは、全く同じだった」[61]と宮崎は書く。彼は、自身が間接的にしか知らない「原爆」＝「太平洋戦争」を通して、自分の生まれた年よりも60年近く前の出来事である「戊辰戦争」を理解しようとしているからこそ、両者が同じに見えるのだということに気付いていない。出征し、戦友の死を身近に経験した者であれば、あるいは原爆や空襲にさらされ、死の恐怖をくぐり抜けて生き残った者であれば、その経験を通じて戊辰戦争をもっとリアルに想像できたかも知れない。しかし、敗戦当時20歳であったはずの宮崎には、そのどちらの経験もうかが

えない。[62] 宮崎の「観光史学」が持つ「軽さ」は、同時代的に確かにあったはずの一五年戦争を自分の経験とすることなく、自身が経験したはずもない遠い昔の戊辰戦争へと没入することによって、避けようもなく生じたことだったのではないだろうか。

戦後会津の「観光史学」の限界は、もはや明らかであろう。戊辰戦争や幕末維新史をいくら研究しても、現代の会津人たちがはまり込んだ袋小路の突破口は見えない。萩と会津若松との間にあるとされる「怨念」とは、戦後会津で編み上げられた「歴史」が生んだ、戦後生まれの新しい幻影なのである。牧野登は、それが幻影であることに気付いていた。しかし、その幻影の向こうには何が隠されているのか。また、掘り下げるべき「悲劇の内因」はどこにあるのか。そうしたことが戦後会津ではっきりと意識されることは、現在に至るまでついになかったと言わざるを得ない。重要部分のピースが欠けたまま組み上げられたジグソーパズルのような戦後会津の「観光史学」は今や、会津若松における観光産業の長期低落傾向とも重なって、その近代史もろとも忘却されてしまう危機にあると言えるのではないだろうか。

ここまで、戊辰戦争から現代に至る、近代史上の「敗北の共同体」としての「会津」の来歴をたどってきた。最後に、その来歴を簡単にまとめるとともに、今後に向けてどのような示唆を得ることができるのか、検討することにしたい。

Ⅳ　おわりに

会津近代史は、二度にわたる敗北との苦闘の歴史であった。会津の人々が勝者の気分を味わえたのは、ほんのつかの間でしかなかった。にもかかわらず、ゆかりを有する人々のアイデンティティを、「会津」は近代を通して形成し続けている。「賊軍」とラベリングされ、戊辰戦争後も「敗者」であり続けた「会津」は、どうやって生き残ってきたのか。そのサバイバル戦略を明らかにするというのが、本論の目的であった。

近代会津のサバイバル戦略は大きく二つの時期に区分できる。前半は戊辰戦争から第二次世界大戦までであり、後半は第二次世界大戦後、現在に至るまでの時期である。

旧会津藩士たちは、戊辰の敗北を抱きしめて、「雪冤勤皇」という戦略をとった。敗戦の雪辱を再戦に期すことは、明治近代国家が整備され、確立されていく中では、もはや不可能であった。そこで、「敗者」の汚名を避けようもなく引き受けた彼らは、維新史論をもって官製の「王政復古＝官賊史観」に挑戦し、冤を雪ごうとしたのである。それは、「佐幕」と「勤皇」との二律背反性を否定した「佐幕勤皇」という主張に結実した。

「雪冤勤皇」という路線が立てられるや、ここから「会津」の「勤皇」は加速する。それはまるで、「賊」として一度は「勤皇」という近代日本の国家原理の外へ放り出された歴史からの反作用のようであった。「会津」は、「勤皇」に飢えていたのである。

松平節子（勢津子）が秩父宮雍仁と結婚し、

徳富蘇峰が保科正之以来の会津藩の勤皇に太鼓判を押し、白虎隊がイタリア・ドイツから注目される。昭和に入り、「雪冤」は完全に過去のものとなったが、「会津」というアイデンティティ＝リソースがネイション一般に解消されることはなかった。同じ枠組みがネイションの周縁から中心へと移動し、その「勤皇」だけがひたすら肥大していったのである。この時期、会津を名に負う人々は、日本国内における国民精神総動員という時流に乗って、我が世の春を謳歌した。

だが、こうした路線は1945年の敗戦によって全面的に破綻する。「会津」は再び「敗者」となった。この「第二の敗戦」に「会津」はどのように対処したのか。そのサバイバル戦略は、「会津」自身の敗戦以前のそれとも、また戦後日本の一般的な路線とも異なる独自の側面を見せる。

その直前まで、確かに「勤皇」に熱狂していたはずの会津の人々は、昭和の敗北を抱きしめることはなかった。戦争の死者は、まるごと忘却された。まるで、大したことは何も起きなかったかのようであった。1908（明治41）年以来、常に陸軍連隊が駐屯する軍都であり、「日本精神」に連なる「会津精神」「白虎隊精神」の地として名に聞こえた会津・若松は、その生々しい直近の記憶を喪失したかのようであった。

その記憶の空白を、戊辰戦争が埋めたのである。

「しかし、戊辰戦争のときは、こんなもんじゃ済まなかったぞ。そりゃひどかった」[63]

明治10（1877）年生まれの宮崎十三八の父親は、その父親から何度も聞いた話をこのように語ったという。「戦争を知らない子供たち」であった世代の語る戊辰戦争が、その子の世代によって語られる。第二次世界大戦後の会津における「戊辰戦争」の語りとは、そのようなものであった。直前の戦争を語らぬ者が、祖父が経験した遠い昔の戦争を語る。その語りが、長らく軍都として栄えた若松を立て直すべく構想された観光都市化政策と合流し、戦後会津の「観光史学」を形成していった。

人々は、1945年に至るまでの近代の記憶を、戊辰戦争で代替しようとした。当然、矛盾は生じる。昭和初期、「会津」全体が「勤皇」に邁進していた頃には問題にもされていなかった「長州への怨恨」が、戦後になって盛んに語られ出した。彼らの歴史意識は幕末維新期に固着した。いったん克服された「賊軍」という初期設定が呼び戻され、現在に直結させられた。戦後歴史小説の巨人・司馬遼太郎と蜜月関係を結んだ会津の「観光史学」は、「戦争を知らない戦中派」に担われて、飯盛山の参道に象徴されるような活況を呈したのであった。

そして現在、つかの間の新撰組ブームはあったものの、会津若松の観光産業にかつての活気は失せている。戦後会津を規定してきた「観光史学」は、方向性を失って今や迷走状態にあると言っても過言ではない。

「雪冤勤皇」戦略は「第二の敗戦」によって破綻し、「観光史学」戦略は決定的には破

綻せぬまま迷走を続ける。近代「会津」のサバイバル戦略の結末を一言でまとめれば、そのようになろう。両者はともに戊辰戦争について盛んに語ったが、その意味は違っていた。

「雪冤勤皇」戦略の当初の担い手にとって、戊辰戦争とは自らの、あるいは親や子、兄弟姉妹の戦争であった。近代の「会津武士」たちは、彼らの痛みを肌に感じていた。だが、数々の士族反乱の挫折を前にしては、武力による雪辱はもはや有りえなかった。そこで彼らが手に取ったものこそ、筆であった。日本という近代国家は、「物理的暴力行使の独占」[64]を比較的早い段階で実現し、彼らの史論による挑戦を許容する余裕を、明治20年代には既に有していた。「雪冤」を果たした彼らは、残った「勤皇」路線を突き進んだ。かつての「賊軍」は、ある時期からは「官軍」の先頭を切って、1945年に完膚なきまでの「第二の敗戦」を迎えるまで走り続けたのである。それが、「雪冤勤皇」路線が行き着いた結末であった。

いっぽう、「観光史学」戦略の担い手にとっては、戊辰戦争とははるかに遠い昔の戦争であった。戊辰戦争から「王城の護衛者」の初出まで97年、当事者はもはやこの世にはいなかった。本来であれば、「観光史学」の当事者たちにはもっと直近に語るべき戦争があるはずであった。確かに空襲被害はなかった。戊辰戦争のように城下に死屍累々といった光景もなかった。だが、「雪冤」の余勢を駆って「勤皇」路線を突っ走り、「日本精神」の中心を自負して「白虎魂」を叫んだのは誰だったのか。奉天・ノモンハン・ガダルカナルへ、あるいは南京へ、インパールへと陸軍部隊を送り出し続けたのはどこだったのか。彼らが戦争を語ろうとするのであれば、何よりもまず、こうした戦争を語らねばならないのではないか。「観光史学」が内包する「軽さ」は、単に観光用の歴史だというだけでなく、直近の戦争を語ることを忌避し、当事者性の乏しい戊辰戦争を語ろうとすることからも生じているのである。近代における「会津武士」が可塑的な概念であったのと同様に、近代を通して「会津」が紡ぎだしてきた「歴史」もまたきわめて可塑的なものであった。そのことに無自覚な「観光史学」の語りは、真剣であればあるほど、喜劇性を増していった。「観光史学」の担い手はいま、自らの物語の泥沼に足をとられて、身動きが取れずにいる。

1945年から数えても60年が過ぎた。1867年から60年が過ぎた1928年は、「雪冤勤皇」路線のクライマックスともなった秩父宮と松平節子（勢津子）の結婚の年であった。「会津」の「観光史学」は、今後どこへ向かうのであろうか。筆者が本論で行なったのは、その「歴史」のジグソーパズルに欠けたピースを拾い上げることだけであったかも知れない。いずれにせよ、今わかっているのは、二度の敗戦はともに、会津近代史において看過することの許されない事実だということである。

注

1　ここで筆者が念頭に置いているのは、「政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならないと主張する一つの政治的原理」という、アー

ネスト＝ゲルナーによるナショナリズムの定義である（加藤節監訳『民族とナショナリズム』岩波書店、2000、1頁）。

2　板垣退助監修『自由党史 上』岩波文庫、1957、28 - 29頁。

3　ここでいう「東軍」とは、戊辰戦争における会津藩など佐幕派を指す。この呼称を用いる場合、薩長をはじめとする新政府軍は「西軍」となる。

4　宮崎十三八編『会津戊辰戦争史料集』新人物往来社、1991、287頁。なお、引用に際してカタカナをひらがなに改めた。

5　会津若松市内の西軍墓地に葬られた西軍の戦死者が174名であるのに対し、東軍戦死者の主要埋葬地である阿弥陀寺と長命寺だけでも約1,500体が埋葬されているとされる（今井昭彦「幕末における会津藩士の殉難とその埋葬――会津戦争を事例として――」福井勝義・新谷尚紀編『人類にとって戦いとは５ イデオロギーの文化装置』東洋書林、2002、所収）。

6　『戊辰戦争といま　企画展展示解説図録』福島県立博物館、2004、36-38頁。

7　大久保利謙『佐幕派論議』吉川弘文館、1986、57-58頁。この時期には、戊辰当時の会津藩主であった松平容保の長男・容大に子爵の爵位が授けられており（1884年）、会津松平家は既に華族として「政権へゲモニー」内に列せられていた点にも留意したい。

8　以上、前出『戊辰戦争といま　企画展展示解説図録』41頁参照。

9　田中『明治維新観の研究』北海道大学図書刊行会、1987、163頁。ただし本論では、引用を除いて「勤王」は「勤皇」に統一している。

10　北原雅長『七年史』上巻（啓成社、1904）に山川健次郎が寄せた序文に見える表現である。なお、引用にあたっては復刻版（臨川書店、1972）を参照した。

11　田中『明治維新観の研究』167頁。

12　松浦玲『徳川慶喜』中公新書、1975、190-191頁。

13　大内寛隆『近代戦争と福島』歴史春秋社、2001、92-94頁。

14　東京招魂社は1879（明治12）年６月４日付をもって別格官幣社に列せられ、靖国神社と改称している（『靖国神社誌』靖国神社、1911、再版2002、15頁）。なお、東京招魂社／靖国神社の整備過程については、阪本是丸「靖国神社の創建と招魂社の整備」『国家神道形成過程の研究』岩波書店、1994、所収、が詳しい。

15　『靖国神社誌』87-88頁。また19頁以下の「合祀年月別」表も参照。

16　最初にこの問題を取り上げたのは、「明治政府の藩閥の枠組みを超えた旧大名家の連合」（田中『明治維新観の研究』186頁）からなる史談会であったらしい（牧野登『会津人が書けなかった会津戦争』歴史春秋社、1997、240-242頁参照）。

17　村松恒一郎（1864-1940）は宇和島出身、『萬朝報』や『大阪朝日新聞』などでの新聞記者生活を経て政治家となり、衆議院議員を五期勤め（憲政本党・国民党・民政党）、また東京市議も長く勤めた。普選派の闘士として知られた人物である。

18　『会津会々報』第４号（1914年７月）62-63頁。なお、原文のカタカナをひらがなに直している。

19　『会津会々報』第４号、63頁。

20　以上、『東京朝日新聞』昭和３（1928）年１月７日。なお、句読点を適宜補った。以下同じ。

21　『東京朝日新聞』昭和３（1928）年１月８日。

22　『東京朝日新聞』昭和３（1928）年１月19日。むろん、松平保男自身は戊辰戦後（1878年）の生まれである。

23　早川喜代治『徳富蘇峰』徳富蘇峰伝記編纂会、1968、525-526頁。なお、引用にあたっては復刻版（大空社、1991）を参照した。

24　早川『徳富蘇峰』531頁。

25　米原謙『徳富蘇峰』中公新書、2003、219頁以下参照。

26　早川『徳富蘇峰』534頁。

27　『小学国史 下巻 尋常科用』1941、103頁。なお、引用にあたっては復刻版（大空社、1987）を参照した。

28　『会津会雑誌』第58号（1941）１頁。

29　ただし、ここでは靖国神社と会津藩戦死者との問題がまったく閑却されていることに注意したい。「賊軍」として日本ネイションの境界外に追いやられたままの戦死者たちは、この時点ではもはや、「会津武士」たちからも忘れ去られてしまっているのである。

30　松平節子は結婚に際して、皇太后と同字であることを理由に「勢津子」と改名している（『東京朝日新聞』1928年９月19日）。

31　後藤康二「白虎隊テクストについての覚書１」『会津大学文化研究センター研究年報』第８号、2002、63頁。

32　『国民教育』は全12巻本（本巻11巻＋別巻１巻）となって復刻されている（下村哲夫監修、エムティ出版）。ここで参照した昭和17年７月号は第６巻（1991）に収録されており、筆者はこれを参照した。

33　五十嵐竹雄「神聖観の会津魂」（『国民教育』昭和17年７月号所収）66頁。原文には「会津藩教会」とあるが、文脈からして明らかに「教学」の誤植であろう。

34　目黒栄「会津精神を生かせる教育実践」（『国民教育』昭和17年７月号所収）81-82頁。目黒栄は当時、鶴城国民学校校長であり、鶴城少年団長として積極的な少年団の運営で知られていた（後藤康二「白虎隊テクストについての覚書２」『会津大学文化研究センター研究年報』第９号、2003、所収、68頁）。

35　中村彰彦は、保科正之の事蹟は「明治以降ほとんど闇に埋もれてしまった」と評する（『保科正之』中公新書、1995、190頁）が、そこにはこの時期の「保科正之ブーム」がすっぽりと抜け落ちている。
36　目黒「会津精神を生かせる教育実践」85頁。
37　会津史談会調査部編『新聞資料集成 若松九十年誌』会津史談会、1989、53-58頁および後藤「白虎隊テクストについての覚書１」62-63頁。
38　なお、再反論記事「松平家論」において『会津日報』は、藩政時代からの「土着若松人」は三割くらいではないかとした上で、「戊辰の役の是非は言はぬ。然れ共市民の今日ある、市民の余り幸福ならじ、市民の時勢に遅れて今尚ほ逆境に沈淪するは皆是れ戊辰の役に起因せぬはない」（『新聞資料集成　若松九十年誌』55頁）と述べ、戊辰戦争に関して当時の若松市民の間に存在していたであろう微妙なわだかまりを代弁している。
39　後藤康二「白虎隊テクストについての覚書２」67頁以下参照。
40　米原『徳富蘇峰』228頁。
41　『福島民報』1945年10月11日。引用は、小島一男編『新聞でみる会津の昭和史』歴史春秋出版、1997、による。以下同じ。
42　『福島民報』1945年10月18日。
43　『福島民報』1947年５月17日。
44　『会津若松史７　大正・昭和の会津』会津若松市、1967、304頁。以下、会津若松市の観光政策については本書を参照している。
45　『会津若松史７』307-308頁。
46　『会津若松史７』308頁。
47　赤澤史朗「戦後日本における戦没者の『慰霊』と追悼」『立命館大学人文科学研究所紀要』第82号、2003、119頁。
48　赤澤「戦後日本における戦没者の『慰霊』と追悼」120頁。
49　会津には、連隊駐屯地でありながら、空襲など直接的な戦争被害がなかったという、戊辰戦争とは異なる「幸運」な事情があった。
50　『ならぬものはならぬ　会津武士の精神が日本を救う』財界21、2003、154頁。早川は1935年生まれ、中央大教授などを経て市長に当選し、現在は白虎隊記念館理事長。
51　『ならぬものはならぬ』157頁。猪俣は1920年生まれ、会津若松市議・福島県議などを経て市長に当選した人物であり、会津若松市長として初めて、「萩との和解」論を提起した人物として知られる。なお、宮崎十三八については後述するが、早乙女貢は1926年生まれの小説家、長編小説『会津士魂（正・続）』ほか多数の著書がある。
52　以下、宮崎十三八の発言については、『会津人の書く戊辰戦争』恒文社、1993、参照。
53　司馬遼太郎『歴史を紀行する』文春文庫、1978、47頁。
54　例えば、古川薫「蟷螂の斧を落とす」文芸春秋編『司馬遼太郎の世界』文春文庫、1999、所収、など参照。
55　以下、畑敬之助の議論については、『戊辰怨念の深層』歴史春秋社、2002、による。
56　牧野『会津人が書けなかった会津戦争』160頁。
57　牧野『会津人が書けなかった会津戦争』72頁。
58　牧野『会津人が書けなかった会津戦争』189頁。
59　宮崎『会津人の書く戊辰戦争』63頁。
60　同頁。
61　宮崎『会津人の書く戊辰戦争』66頁。
62　宮崎と旧制会津中で同級であった畑敬之助の証言によれば、宮崎は1944（昭和19）年に徴兵検査を受けて入営したものの、その部隊は福島県内に配備されたまま敗戦を迎えたという。
63　宮崎『会津人の書く戊辰戦争』63頁。
64　マックス＝ヴェーバー（脇圭平訳）『職業としての政治』岩波文庫、1980、９頁。

＊投稿受付　2006年３月24日
最終稿受付　2006年６月５日

A Genealogy of Modern Aizu Identity

TANAKA Satoru*

Abstract

In most of modern nation states, national memories are covered in glory of victory. On the one hand, a story of victory brings a cohesive force to people in a community. On the other hand, news of defeat causes decline in reliability on the community. We can expect that memories of a defeat or humiliation will result in identity crisis of people in the community. Some communities, however, are formed on a shameful defeat. It is because there are always both winners and losers in all the fights, and no one can win at all times. If so, how do they keep up their identity in situations when they are defeated?

The Meiji Restoration started the modern history of Japan. At that time, the loser was the Tokugawa shogunate's side, especially the Aizu Clan. Since then, Aizu people were labeled 'rebels' of the nation in modern Japan. How did Aizu people try to keep up their identity?

Before 1945, they tried to restore their identity by taking the 'Setsuen-Kinno (雪冤勤皇)' strategy, that is to say, the strategy to clear their name of a stigma and support the Emperor. The trial once succeeded, and they were at the height of their prosperity as a center of Japanese militarism in the early 1940s.

But in 1945, the second defeat for Aizu people came suddenly. It brought them a serious identity crisis again. After World War Ⅱ, in the face of the crisis, they took the 'tourist history' strategy, which means they try to compile attractive local history for tourists. In this case, they did not recall the defeat of 1945 but tell of 1868, when they got defeated in the Boshin Civil War. Through the 'tourist history,' they converted the military city Wakamatsu into a historical tourist resort Aizu-Wakamatsu. Moreover, the Aizu community as a promoter of imperial militarism was also converted into a 'victim' of modern nationalism.

Now Aizu people seem to forget World War Ⅱ as the result of their modern

*Graduate Student, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.

history from 1868 to 1945, and to remember only the Boshin Civil War. But in fact, they got defeated twice.